

国
(問題)
語

2014年度

〈2014 H26082020〉

注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意
 - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (2) マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

大衆——このモンスターが小魚の群れのように、激しい反転の動きをくり返すさまを、オルテガは見逃さなかった。大衆を、文字どおり正面から主題にすえたのはオルテガ・イ・ガセット（一八八三—一九五五）である。

『大衆の反逆』を書きながら、オルテガは思いをめぐらす——伝統的な精神が跡形もなく消え去った時代、これが私たちの生きている時代である。では伝統と手を切ることで何を、私たちは失ったのだろうか。

それは第一に、過去からの声を、つまりは規範と私たちが手を切ったということである。社会秩序をつくりあげるルールや規範は、時間の積み重ねによってなじんでゆくものであるが、それをここでは「慣習」と呼ぶことにしよう。その慣習を失ってからのというものの、日常生活から芸術、政治にいたるまで、あらゆる分野で起こる事件に、私たちは素手で取り組まねばならなくなった。参照すべきモノサシが何もないからだ、「ヨーロッパ人は、まったく一人ぼっちなのだ。彼の傍には生ける死者がないのだ」（オルテガ）。私たち大衆は、時間の積み重ねから切り離され、死者からの教訓を聞く機会を失ったこと、これを孤独な一人ぼっちだとオルテガは言っているのである。それはたとえば、柳田国男であれば盆と祖霊の消滅に見出すはずの現象である。

古くは私たちの傍らに寄り添うように、死者たちの霊魂はとどまり見守っていたのだった。この国土にながらく留まっていた霊魂を、しかし私たちは殺してしまった。家から祭壇が消える。多くの先祖たちが翁と媼に扮して子孫をたすけ、護ろうと還ってくる場所、「盆に平和の家に還つて来る祖霊」たちの居場所を私たちは家から奪った（柳田国男）。

家から出て行かせるとは、私たちの心のなかで絞め殺すという意味である。それは音もなくある日、静かにこの国から死者が葬られた瞬間である。悲鳴も、もの音一つもせず、死者は私たちのまわりから姿を消す。

もちろんこれは柳田が見た日本の姿である。だがオルテガもまた気がついたのだ、私たちが「一人ぼっち」だということに。群れ集う大衆であるにもかかわらず、つねに孤独感にさいなまれていることに。

また第二に、一人の人間としても私たちは一人ぼっちである。過去と現在が断絶したことによる孤独だけではない。空間的にも私たちは断絶している。現代社会を生きる私たちは、きわめて自閉的であって他人との関係は希薄になっているのだ。なぜなら他人との合意と承認によって、はじめて基準や意味はできあがるものなのだが、自分のなかに閉じこもっている限り、世界を理解し物事を判断する基準は曖昧で、そのときの気分で評価はコロコロ変わってしまうからである。こういった自閉的な人間たちが生きている時代、すなわちきわめて強い自負心をもってみたり、「同時に自身自身の運命に確信のもてない時代」が現代なのである。「自分の力に誇りをもちながら、同時にその力を懼れている時代。それがわれわれの時代なのであらう」（オルテガ）。

この基準の喪失と、それに翻弄される人々の群れが大衆社会であると言つてよい。死者は時間的にも、他者も空間的にもつながりを絶たれた個人が無意味の世界に落ち込んでいく有様に、オルテガは嫌悪感を禁じられなかった。

このようなヒリヒリするような個人を抱えて、人はどうするか。どうやってみずからの拠り所を探りあてるか——オルテガとアーレントの時代の大衆は、どこでも携帯可能な血や魂に飛びついた。隣国にいる同胞と結びつく理由を与えてくれるからである。また不当に制限された地域を超えて、自民族の本来の姿に拡大運動を正当化できるからである。隣国にいる血の同胞のもとまで、私たちは領土を拡大せねばならない——そう人々は考えたわけだ。

血といういかかわしいことばかりも分かるように、ドイツとロシアは人種問題を生み出した。それはイギリスとフランスのモップ（⁵）より、はるかに深刻な人種思想である。それがドイツやロシアの汎帝国主義の正体なのであった。大衆の心のなかに人種思想を注ぎこんだのである。アーレントの場合、それをナショナリズムではなく、「疑似神学」と呼ぶべきだと思つた。

ナショナリズムはしばしば不当にも宗教の代替物もしくは「新しい宗教」であると非難されるが、正しく言えばこの種族的ナショナリズム、特に汎スラブ主義における種族的ナショナリズムが実際に疑似宗教的理論と神聖の觀念を生んだのである。（アーレント）

だからまず、ナショナリズムは全体主義ではない。

全体主義を、トラヴェルソを参考に「独裁者の支配を歓迎する雰囲気、集団である」と定義しておいた。しかし今や、

もう少し詳しい定義をすることが出来る。第一に、全体主義に雪崩れこむ人々の心は自閉的で孤独である。なぜなら彼らは過去とも他者とも断絶しているからだ。第二に、みずからの過去に対して否定的であり、つねに現在の自分に不満を抱えている。そして第三に、伝統と断絶し、不平をいだく人々は、つねに未来を求めて変化と移動を好んでいる。空洞と化した心のなかに、何かを受けいれることで安心しようとするのだ。そこにしのび寄るのが、人種主義であり疑似宗教なのである。それこそ全体主義だとアーレントは言ったのだった。

安定した秩序と均衡を重視すること、運動や移動よりも土地に刻みできた歴史、先祖の営んできた労働を受け継ぐこと、これがナシヨナリズムなのである。⁶ 定住こそ、ナシヨナリズムの第一の定義である。孤独に打ちひしがれた人間の無目的な運動とそれは対照的な立場のことだ。ナシヨナリズムと「種族的ナシヨナリズム」をアーレントは厳密に区別していることに注意しなければならない。種族的とは、血を求めて広がること、すなわち全体主義のことだからである。

(先崎彰容「ナシヨナリズムの復権」による)

(注) モツブ：移り気な群衆や暴徒のこと。

問一 傍線部1「生ける死者」とは何の比喩か。次のイ〜ホの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 慣習 □ 孤独 ハ 時間 ニ 大衆 ホ 他人

問二 傍線部2「悲鳴も、もの音一つもせず、死者は私たちのまわりから姿を消す」とは、どういうことを言おうとしているのか。その説明として最も適切なものを、次のイ〜ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ お盆など死者を祭る行事が、現代人が故郷を喪失したために自然となくなってきたこと。

□ 人々が伝統を裁ち切って近代社会に生きようとするのを、何の疑問もなくよしとすること。

ハ 核家族化が進んで世代間の交渉が絶え、人々が古くからの習わしに耳を貸さないのが当たり前となったこと。

ニ オルテガの言う大衆が時間の累積を認めずに直進する時間だけを信じたために、死者さえもが一人ぼっちになったこと。

問三 傍線部3「自分の力に誇りをもちながら、同時にその力を懼れている時代」の説明として最も適切なものを、次のイ〜ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 現代に生きる人びとは自己の力への自負心は持っているが、他人との関係を失ったためにそれを測定する基準を持たないこと。

□ 現代に生きる人びとは、過去とも切れ、他人とも切れている自分だけの能力を自負しているが、そのコントロールの仕方を知らないということ。

ハ 現代に生きる人びとは、他人と比べずに自分の力を信じることが出来るが、その反面、その力がどのように作用するかを自分では決められないこと。

ニ 現代に生きる人びとは、いま・ここにいる自分だけを頼みにするが、他者との関係を持てないので、そのような自分を自分としてうまく承認できないこと。

問四 傍線部4「無・意味の世界」の説明として最も適切なものを、次のイ〜ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 慣習が有機的に組織されていない世界。

□ 慣習が存在する意味が失われている世界。

ハ 慣習が意味を持つ契機が失われている世界。

ニ 慣習が人々に何ら働きかけることのない世界。

問五 傍線部5「疑似神字」の説明として最も適切なものを、次のイ～ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 空虚な過去を否定して未来を信じること。

ロ 自己の根拠として同胞間の連帯を信じること。

ハ 血というメタファーを頼りに領土拡大を善だと信じること。

ニ 人は人種によって区別できるというイデオロギーを信じること。

問六 傍線部6「定住」とあるが、この言葉に着目してナショナリズムと全体主義について説明するとどうなるか。最も適切なものを、次のイ～ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ その土地の習わしに教えを請うのがナショナリズムで、希望も持てずに世界を浮遊する人々を引きつけるのが全体主義である。

ロ 伝統に根ざした文化や文明を基準に生きるのがナショナリズムで、人々が自信を喪失した果てにたどり着くのが全体主義である。

ハ 過去と向き合ってその土地を変えていくのがナショナリズムで、種族という根拠のない思想にとらわれているのが全体主義である。

ニ いまいる土地を守るのがナショナリズムで、民族という血に基づいた拡大運動に引きつけられて土地を移動するのが全体主義である。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

これまで近代の成立を背景にスポーツがいかに個人神話を育んできたかを語ってきたが、この個人神話という言葉は本来的には矛盾に満ちた用語法である。個人的な神話などむしろ「妄想」と呼ぶべきではないかというのは正論だが、スポーツの場合にこの主張は当てはまらない。

社会の輪郭が個々人にとって想像可能な範囲に収まっており、同時に自然や外敵の脅威によって容易に離散を余儀なくされるかつての共同体であれば、神話は確かに皆の共有物であった。神を中心とした世界観や公権力を擬人化した神話を信じられなければ社会秩序は形成できなかったし、それ以前に社会生活自体が維持できなかった。

しかし、近代資本主義が成立したところではそんな不安は^a散失してしまう。ここでは、特に深い哲学者や社会学者でもなければ、社会秩序の存在を疑うことさえ困難である。もちろん現実には社会不安が絶えたことなどないし、個々の出来事によって社会秩序が破壊されることさえしばしば起こるのは事実だが、それでも日ごろ人々が痛感するのは、むしろ「出口のなさ」であったり「無力感」であったり、要するに社会の過剰な存在感である。¹ 圧迫を覚えるまでに存在を誇示する社会のために、人は努めて神話を想起する必要を感じない。そこに神話の個人化の可能性が開かれる。ともすれば「鉄の檻」にもたとえられる単調な合理性に押し込められる状況下で、人々はむしろ神話の力で「個」の多様性が実現されることを期待するようになる。その結果、言葉としては矛盾のある個人神話が必要とされ、その神話を生み出す装置のひとつとしてスポーツという社会実践が成立したと考えると、それに付随する現象の説明は容易になるかもしれない。

こうしてスポーツと近代資本主義の共生関係が強調されると、それに手厳しい批判を投げかける人がいても不思議はない。クーベルタンやデームが、あるいは現役のIOC会長がいくらスポーツをほめたたえても、結局それは現代社会を支配する人々が抑圧の代シヨウ^bとして一般大衆に提供した気晴らしにすぎないのではないかという批判は古くから投げかけられていた。スポーツ論の教科書にしばしば登場するホイジンガでさえ、スポーツは遊びとしては真面目すぎるものとして批判している。彼によれば、その官僚的な組織化が、専門競技者と素人の分離が、スポーツから本来あるべき社会性や聖性を失わせ、遊びとしての最良の部分を損なわせているという。³

実際、ある面ではスポーツ文化は一部の支配階層（資本家）の価値観を大衆に押しつけるものだという批判を否定できないだろう。

リチャード・グルノーやジョン・ハーグリーブズにしたがえば、社会の下位に位置づけられる人々にもスポーツを通じて自分たちの価値観を実現する可能性は開かれているし、支配層の価値観からの相対的な自立性は確保されている。⁴ しかし、むしろそうした交渉を通じて社会の下位層は上位層の価値観を受け入れるのだし、そんな交渉を可能にするものだからこそスポーツはイデオロギーとしての力を発揮できる。ピエール・ブルデューが指摘するように、社会の支配層は実際には一枚岩な存在ではない。社会における支配―従属関係は、全体を大まかに見れば上下あるいは上中下といった形で描写できるが、厳密には資本の多様性（資本、文化資本、社会資本など、具体的には現金や土地の保有高、言語能力や資格の有無、国籍や人種やエスニシティの違いなど）にしたがって横の広がりをもっている。そのため支配的な価値観の多様性を前提とすれば、スポーツにおける被支配層の自由も、上から与えられたもののなかでの選択の自由すぎないと考えることもできるだろう。

しかし、だからといってスポーツが悪しきものだとは断定するのは間違っている。問題はスポーツ文化に限ったことではなく、すべての文化に共通するジレンマなのだ。イーグルトンのいうように、すべての文化が支配のイデオロギーとかわっているなら、すべての社会性には抑圧的な要素がともなっている。彼によれば、現代のイデオロギーは意識すれば自分から遠ざけることもできるような部分的な存在ではない。それはまさに文化そのものであって、それなしでは我々は生きていく意欲をもつことすらできない。社会は我々の可能性の地平であると同時に、常に束縛の鎖なのだ。

スポーツを含めてあらゆる文化が常にすでに抑圧的なイデオロギーをはらむことを認めるが、かといって人間には自由な生き方が原理的に不可能だと主張したいわけではない。これまで文化の遊戯性を強調してきたのは、そうした悲観論に抵抗するためである。ホイジンガは遊びをすべての創造性の源として正しく指摘したが、人間の自由もまたそこから生まれている。

あわてて付け加えるが、この主張は「遊びというのはいわば（現実）と距離を置くことであって、その現実からの離

反が人間の自由を生む」といった素朴な議論に還元されてはならない。遊びを超俗の境地に限定して理解するのはあまりにも日本的な（あるいは東アジア的な）解釈であって、シラー以降の西洋遊戯論では「現実」との葛藤のなかにこそ遊びは存在する。単に「現実からの離反」として遊びをとらえたなら、あるいは「労働からの離脱」として遊びを理解するなら、そこには「からの自由」しか許されないだろう。⁵ スポーツが、単に社会の束縛から闇雲に逃げ出すための遊びであるなら、それはむしろ人間疎外の道具として非難されるべきかもしれない。

しかし、スポーツ文化は決してそれだけのものではなかったはずである。それは確かに「個人神話」ではあるが、主観的な幻想ではない。スポーツという個人神話の背後には、それを支える組織がありルールがあり、なによりそれを支える現実的な利害関心がある。そこで達成される偉業は、経済的、社会的、文化的、いかなる意味においても幻想ではない。そうした現実性を持ちながら、他方でスポーツは自らの遊戯性を放棄しようとはしない。スポーツの遊戯性を保障するのはその同語反復的な目的意識である。それにならって、スポーツの自由を保障するのはその形式合理的な組織原理に基づいて構築された社会性であると指摘したい。

⁶ 人は自由を語る時、しばしばそれを、個人を束縛から解放する課題として提示する。しかしアドルノにいわせれば、他者から完全に切り離された主体性など幻想にすぎず、それこそが近代人を呪縛にかけている。

確かに近代において個人が社会関係から自立した存在として認められたことは、理想としての自由を語る上での基礎条件ではある。だが、他者とのつながりを否定して自己の恣意を押しつけることが自由であるなら、そこにはなにも理想的なものに残されていない。他者との関係、すなわち社会性を欠いたところに人間の自由は存在しない。それはむしろ「わがまま」とか「手前勝手」と呼ばれるべきだろう。

とはいえ関係性のなかに埋没して、身動きできない状態はやはり自由ではない。したがって自由とは、そうしたほとんど絶望的な状況のなかで、現状に抗い続けることでかろうじて光明が見いだされるものである。我々は常に抑圧を受ける可能性という前門の **A** と、他者に抑圧を加える可能性という後門の **B** に挟まれているのである。自由の獲得にお手軽な処方箋は存在しない。

（西山哲郎『近代スポーツ文化とはなにか』による）

問七 傍線部 a、b に当たる漢字を含むものを、それぞれ次のイ、二の中からそれぞれ一つ選び、その解答欄にマークせよ。

a	イ	ム	想	□	責	ム	ハ	ム	笛	二	皆	ム				
b	イ	シ	ヨ	ウ	撃	□	鑑	シ	ヨ	ウ	ハ	勸	シ	ヨ	ウ	還

問八 空欄 **A**、**B**（本文の最後）に入る語を次のイ、二の中からそれぞれ一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ	狼	□	雉	ハ	狐	二	狸	ホ	虎	ヘ	鳩
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問九 傍線部 1「圧迫を覚えるまでに存在を誇示する社会のために、人は努めて神話を想起するのを感じない。そこに神話の個人化の可能性が開かれる」の説明として最も適切なものを、次のイ、二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 近代資本主義社会は人々を出口のない社会の中に囲い込んで個人として圧力をかけるので、神話を想像するゆとりさえない。そこで社会的な神話を個人に内面化することが可能になる。

ロ 人々は近代資本主義社会を疑うことなく信じすぎているために、社会秩序を維持するための神話をわざわざ求めようとはしない。そこで神話を内面化することで社会をも内面化しようとする傾向が生じるのである。

ハ 人々は近代資本主義社会の内部から出ることではできないので社会の存在を信じさせてくれる神話をあえて求めないが、人々に神話が不要なわけではない。そこで社会から解放された個人の存在を信じさせてくれるような神話が成立する余地が生まれる。

ニ 近代資本主義社会はもうい面も持ち合わせているが、個人に対しては圧倒的なまでに強固に存在しているので、人々は社会の内部に止まることを余儀なくされ、社会の外部を想像できる神話を求めない。そこで自分の内面だけで信じられる小さな神話が生まれるのである。

問十 傍線部2「スポーツと近代資本主義の共生関係」の説明として最も適切なものを、次のイ〜二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 本来は多様であつてよいはずの個人の生をスポーツによって一つにまとめることが、近代資本主義の諸制度を支えていること。

ロ 本来は遊びの要素を多く含むはずのスポーツが、近代資本主義に裏打ちされた組織や利害関係によってしか現実には存在し得ないこと。

ハ 人間にとつてはしがらみでしかない近代資本主義が、スポーツこそがそこからの解放をもたらすという個人神話の生みの親でもあること。

二 近代資本主義は文化をもイデオロギーとしてしまうので、スポーツをも個人神話というイデオロギーの一つとして現実社会に組み込むこと。

問十一 傍線部3「遊びとしての最良の部分」とは何か。最も適切なものを、次のイ〜二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 可能性 ロ 幻想 ハ 自由 ニ 多様性

問十二 傍線部4「むしろそうした交渉を通じて社会の下位層は上位層の価値観を受け入れるのだし、そんな交渉を可能にするものだからこそスポーツはイデオロギーとしての力を発揮できる」の説明として最も適切なものを、次のイ〜二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ スポーツによる社会の下位層と上位層の関わりは、結果として下位層に上位層のイデオロギーを内面化させるが、こうした下位層と上位層との関わりがあるからこそ、スポーツは自由というイデオロギーを社会化することができる。

ロ スポーツによる社会の上位層と下位層との関係は現実的な利害関係があり、下位層にもたらす幻想ではない自立は、多様な自由の中から一つの自由を選択するという上位層に支配的なイデオロギーを実践する力がもたらした結果である。

ハ スポーツによる社会的な成功は、社会の下位層に位置する人々が上位層にステップアップする一手段にすぎないが、それでもそうした社会的な階層移動が可能となることによって、スポーツが文化の一つとして支配的なイデオロギーを広めることができる。

ニ 社会の下位層にある人々は、スポーツを通じて自己を確立することで社会の上位層の人々から自由になれるように見えるが、それは結局上位層の価値観を受け入れたにすぎず、このような相互的な関係性はスポーツの価値を社会に印象づけることができる。

問十三 傍線部5「スポーツが、単に社会の束縛から闇雲に逃げ出すための遊びであるなら、それはむしろ人間疎外の道具として非難されるべきかもしれない」の説明として最も適切なものを、次のイ〜二の中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ スポーツによって現実社会から離脱しようとするだけなら、スポーツは人間として孤立するための手段にすぎないと非難されるべきかもしれない。

ロ スポーツが単に「〜からの自由」という何か具体的な束縛から解放されるためだけにあるのなら、それはただの遊びでしかない」と非難されるべきかもしれない。

ハ 社会には労働など人間としてしなければならないことがあるが、スポーツがそれらを忌避する理由に使われるのなら責任放棄の手段として非難されるべきかもしれない。

ニ スポーツは文化であつて自分から遠ざけることができるものではないが、それでもそこから遠ざかろうとするなら、現実逃避の言い訳として非難されるべきかもしれない。

問十四 傍線部6「他者から完全に切り離された主体性など幻想にすぎず、それこそが近代人を呪縛にかけている」と

いう一文は、スポーツをテーマとしたこの文章全体の中でどのように読めばよいか。その説明として最も適切なものを、次のイ〜ニの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 社会から完全に独立したスポーツなどあり得ないのに、スポーツは個人が純粋に行うものだという妄想が広がっていることを批判的に述べている。

ロ 人間は社会の中に存在しなければならないものに、スポーツだけにはわがままと言っていいような理想を押しつけていることを暗示している。

ハ 人間にとって自己の主体性こそが最も根源的なものだという強迫観念が、スポーツを近代資本主義と切り離された営みとして孤立させていることを示唆している。

ニ スポーツそれ自体が他者の存在なしには成立し得ないものなので、近代資本主義によって階層化された人々を交渉させる手段の一つだと思えばいいと指摘している。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

かかりけれども、互ひに父祖の仇たれば、呉王なほ心許しやなかりけん、「君子は刑人に近づかず」とて、あへて勾踐が面を玉座の前に看せずして、廷尉の職に渡されけり。あまつさへ、越王を典獄の官に下さるる。日々に行くこと一駅、前後の兵に囲まれて、やうやくに呉王の姑蘇城へ入り給ふ。太子王麀^{せま}とは独り越に入れり。父勾踐は、呉に入り給ふ今はのきはの別れ路、南北轅を異にすといへども、落つる泪は諸共に、袂の乾く隙^{ひま}ぞなき。日を経て姑蘇城に着き給ひければ、すなはちくびかせを入れて、土の楼にぞ入れ奉りける。夜明け日暮れぬれども、三光の光をだにも見給はねば、一生ただ冥暗の中に向つて、歳月の遷り流るるをも知らず、泪の浮ぶ床の上、さこそは露も深かりけめ。獄司厳しく日夜に守護し奉るばかりにて、越国の貢物まるらず供御の備へも幽かなり。

さる程に、范蠡^{はんれい}越の国にあつて、越王囚はれに入り苦しめられ給ふ事を聞いて、かの囚はれを救ふ事あたはざれば、

その恨み肝を碎いて、憤り骨髓に入れり。哀れ何にもして越王命を助けて、我が国に帰し奉り、小臣諸共に

a の **b** を雪め、呉を伐つて并せばと思ひければ、ある時范蠡ただ独り忍んで、身をやつし貌を

かへて、簀^{あじふ}に魚を入れて肩の上にこれを荷ひ、魚を沽る商人の真似をして、呉国へぞ行きたりける。姑蘇城の辺に徘徊して、越王のおはす所を問ひければ、帝都の父老教へてけり。范蠡うれしく思つて、やうやく往きて、獄門の内に入らんとす。范蠡貌をかへたりける間、獄司はこれを知らずして、ただ追ひ出さんとするばかりなり。范蠡がいはい、「某はこれ毎日帝都の内に魚を売つて飢ゑをあざむく賤夫なり。しかるに、一箇の魚を獻じて、かの獄中の飢ゑを助けたために、ここに來たれり。商客にまた他事なき事、何ぞこの白頭の老翁を打ち給ふぞや」。典獄の官これを聞いて、すなはち獄門に入ることを許してけり。范蠡悦んで、やうやくに行きて視れば、越王獄中にありて、かたじけなくも文武の才に長じて、六合の間に譽を施し給へる越の国の明主、百司千官をして朝せしむる事もなく、かかるあさましき楼の内に、御貌は憔悴しはてて、旦暮の飢ゑをも継ぎがたき御有様なりけり。勾踐はまた范蠡が身をやつして楼の外にありけるを御覧じて、我この囚に逢ひて、越国すでに敗亡しぬる故に、旧臣もまたかくの如き賤しき父老となりけりと思し召して、楼中の愁ひを語らば **c** と思し召せども、獄司官傍らにあれば心に任せず。范蠡もまた、我が肺肝の謀を宣べ **d** と思ひけれども、獄司前にあれば協はず。君臣ともにこの恨みを解かんとすれども説かれず。ただ一行の書を魚腹の中に納め、獄の内へぞ擲^なげ入れける。勾踐怪しく思つて、食せんとし給へる魚の腹をあけて見給ひければ、

西伯囚^{さいはく} 姜里^{かうり} (西伯は姜里に囚はれ)

重耳奔^{おもむ} 翟^{たい} (重耳は翟に奔る)

皆以^{みな}為^を 王霸^{わうは} (皆以て王霸為り)

莫^も 死許^し 敵^{てき} (死を敵に許すこと莫かれ)

とぞ、書きたりける。越王魚腹の書を御覧じて、いかにもして、命を全うして再び国家を興し、宗廟を盛んにすべき謀を廻らすべしと諫め勧めけるやと思し召して、忠臣国にあり、なんぞ王業を復せざらんと、怙^{たふ}もしくこそ思し召しける。この程はただつかのまも、生^なくるを愁しとかこたれし、吾が身ながらの御命も、かへつて惜しくぞ思し召す。

(『太平記』による)

問十五 傍線部1「南北轅を異にす」は、どのような意味か。最も適切なものを次のイ～ヘの中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 猿は南や北の方向それぞれに走り去った。

ロ 夫差と勾踐の立場は決定的に食い違った。

ハ 子のみ土楼に拘禁されたので父が悲しんだ。

ニ 兵士に囲まれてばらばらになってしまった。

ホ 父と子はたがいに異なる方向に別れた。

ヘ 呉と越の距離は近いが風土の差異が大きい。

問十六 傍線部2「旧臣もまたかくの如き賤しき父老となりけり」は、誰がどのように思ったのか。最も適切なものを次のイ〜への中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 呉王夫差は越王勾践と獄中で対面したが、そのあまりのやつれように驚愕した。
ロ 呉軍の気の緩みにつけこみ、獄中で越王勾践と范蠡は互いの苦勞を慰め合った。
ハ 獄司は変装した范蠡のことに気付いたが、そのあまりの老けように息をのんだ。
二 敗戦の苦勞により范蠡がみすばらしい老人となったと、越王勾践は思い歎いた。
ホ 呉王夫差の信賴する宿老たちは、あまりに年をとりすぎてしまったと悲しんだ。
ヘ 獄司は、賤しい魚売りの老人を范蠡と気付かず、獄門に入れたことを後悔した。

問十七 空欄

c

d

には同じ語が入るが、その語として最も適切なものを次のイ〜への中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ なむ ロこそ ハばや ニけれ ホざり ヘまし

問十八

傍線部3「生くるを愁しかこたれし、吾が身ながらの御命も、かへつて惜しくぞ思し召す」はどのようなことを言おうとしているのか。最も適切なものを次のイ〜への中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 魚の腹の中の手紙が、王の自殺を促すものであったことに衝撃を受け、反発からかえって生きる決意を新たにした。

ロ 王として祖先祭祀を行わなければならないのに、それができない我が身を悲しみ、ひそかに脱獄の決意を固めた。

ハ 幽閉生活に慣れ親しんだため、范蠡の激励の手紙を煩わしく思ったが、その誠実さにうたれ、命を惜むようになった。

二 幽囚生活に堪え忍ぶのがつらいことを口実に、自分一人の命だからと大切にせず、生きることを無意味に思った。

ホ 西伯や重耳のように、幽閉されたにもかかわらず、その後王となった偉人と比べ、我が身の至らなさを反省した。

ヘ 短い間の幽閉でさえ生きるのがつらいと不平を言っていたが、むしろ自らの命をいとおしく思うようになっていった。

問十九

『太平記』と同じく軍記物語に属する作品を、次のイ〜への中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 『竹取物語』

ロ 『曾我物語』

ハ 『宇治拾遺物語』

二 『栄華物語』

ホ 『雨月物語』

ヘ 『源氏物語』

問二十

本文と同様の話が、『史記』「越王世家」に見られるが、次の文章は、本文の後日譚にあたる。これを読んで、あとの(1)(2)の問いに答えよ(返り点、送り仮名を省いた部分がある)。

呉既赦^シ越^ヲ、越王勾践反^ル国^ニ。乃^チ苦^メ身^ヲ焦^レ思^フ、置^キ胆^ニ於^ニ坐^ニ、坐臥^{スルニ}即^チ仰^ゲ胆^ヲ。飲^ニ食^モ亦^{ムル}嘗^ラ胆^ヲ也。曰^ク、女忘^ル **a** 之^ヲ **b** 邪。身自耕^ラ作^シ、夫人自^ラ織^リ、食^ハ不加^ヘ肉^ヲ、衣^ハ不^レ重^ネ采^ヲ。折^セ節^ヲ下^ニ賢^ニ人^ヲ、厚^ニ遇^ス賓^ニ客^ニ。振^ニ貧^{シキヲ}、弔^ヒ死^{セシヲ}、与^ニ百^ニ姓^ニ同^ニ其^ノ勞^ヲ。

(1) 傍線部4「折節下賢人、厚遇賓客」はどのようなことを言おうとしているのか。最も適切なものを次のイ～への中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 自らの信念を屈してまでも賢人にへりくだり、厚く賓客を接遇した。
ロ 時節を見きわめながら賢人としてふるまいつつ、食客の待遇をよくした。
ハ 折しも越に降った賢人に対し、食客が互いに出会えるよう工夫した。
ニ たとえ名がなくとも賢い人を招き、賓客として待遇して教えを乞うた。
ホ 季節の行事に人としての義務を果たし、国内外の賓客を多く招待した。
ヘ 呉をあざむくため賢人を下野させ、敵国の客に対しては厚く待遇した。

(2) この故事に関する四字成語として知られる、最も適切なものを次のイ～への中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 呉越同舟 ロ 越王好勇 ハ 肝胆相照 ニ 克己復礼 ホ 臥薪嘗胆 ヘ 賓客和睦

問二十一 問題文『太平記』と漢文『史記』の空欄

a

b

には、それぞれ同じ語が入る。その組み合わせとして、最も適切なものを次のイ～への中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- イ 鴻門・会 ロ 会稽・恥 ハ 邯鄲・夢 ニ 負薪・憂 ホ 螢雪・功 ヘ 壺中・天

問二十二 問題文『太平記』と漢文『史記』に関する次の記述のうち、内容と合致するものとして、最も適切なものを

次のイ～への中から一つ選び、その解答欄にマークせよ。

イ 呉王夫差と越王勾践は、隣国の王同士なので、時に戦いながらも互いに切磋琢磨して、それぞれの国を豊かにした。

ロ 呉王夫差は、越王勾践を捕えたが、君子は罪人に近づいてはいけないとの戒めを守ったため、勾践に逃げられた。

ハ 越王勾践は、呉で受けた屈辱への復讐の思いを表に出さず、帰国後は人々と労苦をともにしながら自制につめた。

ニ 范蠡は、変装して獄中に忍び込み魚の腹に手紙をしのばせ越王勾践に届けたが、詩の内容を誤解されてしまった。

ホ 越王勾践は、呉王夫差に受けた恥をそぐため、自国の礼儀をただし、他に模範となるような国家をつくりあげた。

ヘ 越王勾践は、赦免してくれた呉王夫差の温情に報いるため、自らを律して、肉を食べず粗末な衣服を着て生活した。

〔以下 余 白〕